
日常

東こう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常

【著者名】

NZマーク

【作者名】 東 こう

【あらすじ】

何処にでもこないうなサラリーマンの男の出来事です。

徹は電車を待っていた。

夕方、大抵この時間帯のプラットホームは、おもに帰宅途中のサラリーマン・中高生達でひしめき合つていて、その大勢と同じように、徹は、2列に並んで準急電車を待っていた。

「はーだるい。イライラする。」徹は思った。

こんなはずじゃなかつた。こんなはずじゃなかつたんだ。

小学生の頃、自分は将来サッカー選手になりたいと思つていた。地域の子供サッカーチームにも所属していた。チームの中では足が速く、それなりにうまかつた。でもまあ、所詮その程度だつた。

中学に入学してからも部活動でサッカーを続けたが、どの大会に出場しても賞などもらえるはずのない弱い部だった。

その頃には、プロサッカー選手になるという夢なんかとっくに忘れて、当時流行つていたお笑いに乗じて、芸人になりたいなんて思つていた。

勉強そつちのけで、だらだらとお笑い番組を見ては、あのコンビの漫才は面白いとか、あの芸人はつまらないとか、偉そうに出演者を評価していた。

高校生になつた頃にはその夢も心の中から消えていた。
勉強も運動もそこそこ、平日はイスに座つてだらだらと授業が終わるのを待ち、休日は友達と遊ぶか、家で「ロロロロして過ご」し、それ

なりに恋愛もして、可もなく不可もなく平穏な生活だった。

この頃には、特に夢など無かつた。

それでも自分は何かすごい人間になるんじゃねーか。かつこよくて周りから憧れるような特別な人物になるんじゃねーか。とひそかに思っていた。

大した努力もせず、将来を深く考えもせず、近くの大学に一般入学した。

大学の学生生活は適当なものだった。サークル仲間との飲み会・合コンなどなど…。考えたら真面目に勉強なんて一度もしていなかつたし、就職のことも「めんどくせー。」「働きたくねー。」とギリギリまで後回しだしていた。（今考えるとなんて馬鹿だつたんだと思つ。）

サラリーマンにはなりたくないかった。何の面白みもない、企業の歯車になんてなりたくないかった。サラリーマンなんて、大体が働きアリみたいで、みじめな負け組だと中高生の頃思つていたし、今も思つている。

でも結局、俺はそのなりたくない職に就いた。

両親は、この不況の時期に、正社員として就職できてよかつたと、喜んでくれた。

両親の笑顔を見ても、俺は、嬉しくなかった。

入社して、8か月がたつた。

通勤ラッシュの人ごみにも、パソコンを見つめてのただただ単調で、だるい作業にも、上司の小言や多少理不尽な扱いや、つらい飲み会にも、慣れれた。

つまらない。… こんなつまらない毎日が定年退職するまで繰り返さ

れていくのか。嫌だ。

毎日、電車に乗っている背広姿の中年男達の田は、まるで死んだ魚の田のようだ。
きっと俺の姿も後十数年たてばそんな風に見えるようになるのだろう。

例えば今俺の隣に並んで電車を待っている50歳代くの男だつてそうだ。

生気がなく長年の疲れが積もつた肩。

少し気弱そうな顔だから、若い頃は上司に怒られてばかりで、へこへこしてて、頑張つても大した役職に就けなかつたような人なんだよ、きっと。勝手にそんな事を考えた。

嫌だよ本当。もう辞めてえなー仕事。

(大学の同級生の)カズとか確かフリーターしてたよな。金ねーけどバイト先の女の子とかこの前カラオケ行つたとか言ってたし楽しそーだよなあ。

仕事したくなー。遊んで暮らしたい。

つーかなんで続けられんの?仕事。

何にも楽しいこと無いじゃん。嫌もう。

そう投げやりな気持ちになつていてるとき、隣の男がカバンから二つ折りの携帯電話を取り出して、画面を開いた。

徹がちらつと見ると、男は、先ほどとは別人のような表情をしている。

幸せそうな横顔。

つい、気になつて男の携帯をのぞいてしまつた。

携帯の画面は、スヤスヤと眠つている赤ん坊の写真だつた。

男が徹に気づいた。

徹は、慌てて「すみません。」と言つて、顔を画面からそらした。

男は、「いえいえ。」と笑顔のまま答えた。

「これはねー。私の孫何ですよ。はは、今年の5月に産まれたばかりの初孫なんです。」

「へー、そうなんですか。可愛いですね。」徹は答えた。

男との会話はそれで途切れ、それから一分程で電車が駅に着いた。
徹は、すし詰めの電車の中で、自分の田から涙が出そうなのを必死でこじりえていた。

なんで、こんな事で泣きそうになつてゐるんだ…。

数分前まで俺は何を考えてた?

何にも楽しいこと無いとか考えて、あの男を馬鹿にしていたじゃないか!

あれが人並みの幸せとかいうやつなのか。

恋をして、結婚して、子供が出来て、子供の成長を見守つて、子供が結婚して、孫が出来て…。

そんな、普通の日常が、あんな幸福な笑顔を浮かべさせるのか。

俺は、勝手にあの男を不幸な男と思つて同情していた。

だけど、別に悪くないじゃないか。サラリーマンだって。仕事なんてほとんどの職業は楽しいものじゃないだろ?。きっと。普通も案外悪くない。かもしだれない。

もう少し続けてみよう、仕事。辞めようと思えばいつでも辞められる
んだから。

徹は、電車を降りて、夜道を足早に歩いていった。

(後書き)

初めて物語を書きました。

読みにくい小説だったかもしれません。

それでも読んでいただきありがとうございます！

小説の感想、アドレスなど頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8362y/>

日常

2011年11月24日22時54分発行